18275

目的の評価

全学学類・専門学群代表者会議
学内行事委員会

1　第 44 回筑波大学学園祭「雙峰祭」目的

「筑波大学は、日本各地さらには世界各地から様々な学問・活動に興味をもつ多くの人が集う国立総合大学として発展し、その特色ある校風を形成してきた。筑波大学学園祭は、学生が中心となってこれを表現し、来場者が筑波大学の魅力を発見する場となることを目的とする。」

この目的を、学園祭運営要領「I. 概要 B. 目的」において定めた方法にて評価し、最後に第 44 回筑波大学学園祭の総合的な評価を行う。
※アンケート集計結果等については「目的の評価補足資料」を参照

2　項目ごとの評価

2.1 「学生が中心となってこれを表現し」

補足資料に記載されている実施企画一覧からわかる通り、今年度も多種多様な企画や発表が実施された。つくばイチ受けたい授業や筑波研究紹介、また一般企画の学術参加枠では研究発表や模擬授業などの学術的な企画が開催され、ステージ企画では音楽やダンスの発表が行われた。また、留学生による海外をテーマとした出店や展示も多数見受けられた。これらの多彩な企画や発表は、国際性と学際性を兼ね備えているという筑波大学の校風が発揮された結果であると言える。学生が生き生きとしており活気があるという声も多く、この目的は達成されたと言えるのではないか。改善点としては、昨年に引き続き飲食系の出店に類似したものが多いという指摘があった。また、筑波研究紹介に文系学問の内容が存在しなかった点は改善の余地があるだろう。

2.2 「来場者が筑波大学の魅力を発見する場となることを目的とする」

学術性、芸術性、国際性といったさまざまな点で肯定的な評価がみられた。全体をみても 84%の来場者が高い満足度を示しており、本学の魅力は十分発信できたと言える。改善点としては、当日の会場における案内表示が不十分であるという意見や、パンフレットの地図がわかりにくいという声が散見されたことが挙げられる。当日迷うことなく雙峰祭を満喫してもらえれば、広大な会場という特徴を活かし限られた時間のなかで本学の魅力をさらに効果的に発信できるのではないか。

3　まとめ

以上の結果を踏まえ、今年度の目的は概ね達成されたと判断する。アンケート結果全体を俯瞰しても肯定的な意見の割合は非常に高いものとなっており、学園祭として大きな成功を収めたと言えるだろう。しかし、展示内容や会場のわかりにくさに不満を抱いた来場者が少数ながらいたことも事実である。今年度以上の成功を目指すため、運営上発生した反省点やアンケート調査で判明した改善点を来年度の運営に活かしてもらいたい。